

摘要：資深的翻訳家最初也还是一个外语的初学着，那么，现在学习外语的大学本科该经过怎样的训练过程才能成为翻译人员？本文就此一问题试探翻译教学方法。

关键词：外语、翻译、教学、中文、日文、可读性

1 問題提起

起点言語の読解力と目標言語の表現力を十分に備えていることが翻訳者として備えるべき最低限の条件である。どんなに優秀な翻訳者も、もともとは初歩から外国語を学び始めたわけで、特に日本では、幼少時からバイリンガルの環境で育ち後に翻訳者になったという例はごく稀であろう。

外国語学習者から翻訳者に脱皮する際にどのような過程を経るのであろうか。また、外国語学習者を翻訳者に育てるにはどのように指導すればよいのだろうか。そもそも翻訳は教えられるものなのだろうか。

1.1 翻訳・通訳行為

言語能力と翻通訳能力について、下記の図を用いて説明してみよう。翻訳・通訳における起点言語はオリジナル言語を指し、目標言語は訳出された言語を指す。中国語から日本語に訳す場合、起点言語は中国語で目標言語は日本語ということになる。

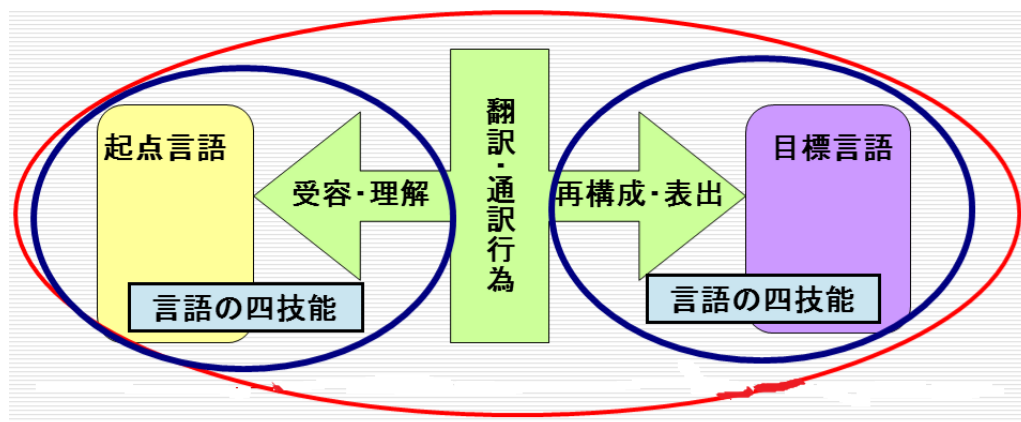


図1 外国語学習と翻訳通訳の関係

図1では、翻訳・通訳行為とは、1) 二言語の間に立って起点言語と目標言語の間を往き来する（起点言語から受け取ったものを目標言語の世界に移動する）こと、2) 二言語が独立して存在しなければならない（起点言語の表現や言語習慣を目標言語に持ち込まない）こと、3) 二言語の運用能力と言語知識だけでなく幅広い世界知識と起点言語が扱っているトピックに関する専門知識が必要なこと、を示している。

1.2 受容と理解（読解力）

外国語学習では、第二言語の四技能（パッシブな能力—読解力・聴解力、アクティブな能力—文章力・発話力）を習得すると同時にその個別言語が属する地域の社会・民俗・歴史などの文化について学ぶ。この過程において、訳読など母語を介した教授法が用いられることがあるが、母語の表現の自然さや巧拙は特に重要な要素ではなく、第二言語の語彙や語法を適切に理解しているかどうか注目されるため、むしろ原文寄りの逐語訳によって学習者の理解度を確認することになる。したがって、外国語学習において習得が期待される翻訳に関連する能力は読解力（受容と理解）である。しかし、初学者が第4学期までに外国語の教科書には、ごく短い会話文か長くても数ページほどの文章にしか触れることができず、長文（一篇の小説、一冊のエッセイなど）を翻訳するために十分な読解力を養うことは難しい。大学の学部で長文を読み解く能力を養い、ある程度の質を備えた翻訳を可能にする指導はどのように行うべきだろうか。

1.3 再構成と表出（表現力）

翻訳は第二言語から母語の方向に行われることが圧倒的に多い。そこで、第二言語を受容し理解する能力があったとしても、母語で再構成し表出するアクティブな能力が不十分であれば質の高い翻訳は望めない。この研究ノートで取り扱うのは日本語を母語とする学生が中国語から日本語へ翻訳する場合についての論考であるため、ここでは日本語を母語とする学生の日本語表現力について考えたい。学生の日本語表現力（語彙・語法・言語知識）については個人差が非常に大きいところではあるが、後述する学生の「訳者あとがき」に見られる翻訳後の所感においては非常に多くの学生が自身の「日本語力の低さ」を痛感している。何事においても自らの不足に気づかなければ改善は望めないものである。では、翻訳の実践によって母語の運用能力を伸ばすことも可能だと言えるのではないだろうか。

2 研究の背景

筆者が担当するゼミでは、日本語－中国語間の翻訳通訳の実践能力を養うことを目標に、言語の運用能力と翻訳通訳能力を向上させるための様々な訓練を行っている。学生は2年時（第3学期）から訓練を受け、3年時秋学期（第6学期）から卒業制作として中国語から日本語への文学作品または映像作品の翻訳にチームで取り組むことを求められる。翻訳の対象となる作品は主に随筆や映像作品（現代劇の連続ドラマ）である。読者の観賞に堪える品質を備えた翻訳作品を完成させることがゼミでの学習訓練の最終目標となる。学習者向けに難易度がコントロールされた教材ではない、いわば容赦のない原語で書かれた作品を最初から最後まで読み通して翻訳し、さらに読者（外部に公表できないため実質的には査読者）に提供するという経験は学生にとっておそらく初めての試みであろう。以下にこれまで数年間の翻訳指導から得たいくつかの所感にもとづいて論を進めていきたい。

3 訳読と翻訳

外国語科目で広く行われるいわゆる「文法訳読」を翻訳の指導に応用することができるだろうか。

翻訳には、最初に翻訳者が原文を読み、次に翻訳者が自分の訳文を読み、最後に読者が訳文を読むというステップがある。外国語学習で行う訳読における読みは、語彙と語法および指示対象を正確に捉える精読が主眼となる。一方、翻訳を前提とした読みでは原作がどのようなジャンルでどのような文体を用いて書かれ、さらに作者が作品にこめたメッセージは何かを理解する味読も重要になってくる。英日翻訳では、よく「翻訳は英文解釈ではないと言われる」が、この「英文解釈」は詰まるところ教室で行われている文法訳読である。教師も訳読を行う際に「日本語に訳してください」という指示を出すので、学生にとっては訳読と翻訳の区別がつきにくい。以下に訳読と翻訳の相違について検討してみよう。

3.1 語彙と語法

学部の中国語科目で使用しているほとんどの教科書には各単元に（または巻末にまとめて）新出単語の一覧表があり、一語に対して日本語の訳語が本文の文脈に則した形で一語だけ示されている（たとえば「能：できる」、「让：…させる」のような形で示される）。これらの訳語は教科書の本文を日本語に訳した時に適切に当てはまるものを掲載しており、訳読にそのま

ま使うことが可能だ。つまり、逐語的に翻訳した結果、採用されるべき訳語を事前に呈示しているということになる。学生は教科書に訳語が出ていればそれ以上は辞書で確認せず、しかも訳読ではピッタリとはまる日本語訳ができるため、知らず知らずのうちに単語から単語へ訳すことができるという意識を持つようになる。そこで翻訳に取り組み始めた当初は、辞書に羅列された訳語の中から訳文に当てはまる適当な一語を探すことが翻訳作業の大半であり、辞書に訳語さえ載っていれば翻訳は難しくないと考えがちだ。これは筆者のゼミで翻訳に取り組む学生が他ゼミで卒業論文を書いている学生から「訳すだけでいいなら楽だ」と言われることが多いと訴えることからもうかがえる。だが、本格的に翻訳を開始すると、辞書だけで翻訳することは難しく、何とか訳語を当てはめてもすっきりと腑に落ちる訳文が完成しないことが少なくない。また、実際の翻訳では（固有名詞・専門用語などは一対一対応の訳語で訳出することができるが）、原文にあっても訳出する必要のない語彙もあれば、原文になくても補わなければ意味の通る日本語文にならない場合もある。しかし第二言語学習で用いる訳読では全ての語を逐一置きかえることが多く、語彙の扱いに関しては、教科書訳読法は、翻訳者を育てるという目的がある場合は、マイナス面が大きいように思われる。

語法に関しては、文法訳読を行うことで第二言語の統語法に対する構造的な理解を深め、日本語との違いを意識させることができる点である程度の効果を期待できるだろう。但し、原文の構造を際立たせるため、不自然な和訳になることは否めず、むしろ不自然な訳文を作ることで学生が原文の構造を理解していることが指導者に確認される。この不自然な目標言語テキストを、文単位ではなく少なくとも段落単位で「和文和訳」（パラフレーズ）して通りのよい日本語文に作り直す作業を加えることができれば、翻訳文として通用するものになるだろう。

3.2 ジャンルと文体および作者の意図

筆者が担当するゼミで、四年生が卒業制作として選んだ連続ドラマの生き生きとしたセリフや随筆に見られる情緒的な文章を翻訳する際に、句や文の単位で直訳するだけでは、リーダブル（readable）な翻訳にはならない。ここで言うリーダブルな翻訳（文章）というのは単に「言語表現が自然で分かりやすい」ということではなく、「適切な言語使用域で書かれており、原文のメッセージがすっと腑に落ちる」文章のことである。このよう

な翻訳は、翻訳者が起点言語テキストを母語で読むのに近い形で理解し、文章を味わうことができこそ可能になる。

訳読では往々にして句や文の単位で訳出することがほとんどであり、まとまったテキストとしてのリーダビリティ(readability)は求められない。さらに中級までの教科書に採用される文章は「情報提供型」の叙述が大半を占め、叙情的な文章は見られない。そこで、全体を見渡して翻訳のスタイルを決める意識を持つこともできず、ただ目の前に呈示された原文テキストを句や文ごとに訳して事足りりとする傾向が生まれる。つまり、「作者の声」を聞くことなく訳出してしまうのである。

4 翻訳の指導

次に、翻訳に関連する科目の内容について紹介する。いずれも筆者自身が翻訳通訳の実務者・研究者としての経験に基づく内容となっている。以下の4.1～4.3は技術的な問題、4.4～4.7は翻訳の本質的な問題を主としている。

4.1 スラッシュ・リーディングとサイト・トランスレーション

スラッシュ・リーディングはすでに英語教育でも広く応用されるようになった、原文にスラッシュ（斜線）や記号を入れながら読んでいく方法である。もともとは会議通訳者が通訳準備としてスピーチ原稿などに書き込むことから始まった読解法である。文法訳読と異なる点は、同時通訳に対応させるために情報提示の順序通りに訳せるよう、センテンスを分割し、必要に応じて指示語を補い、品詞にこだわらない（必ずしも原文の構造を訳文に反映させることのない）訳文を作るという特徴を有している。サイト・トランスレーションは、スラッシュ・リーディングを施した起点言語テキストを見ながら声に出して訳出することである。筆者の担当するゼミの授業では、第4学期から主に数ページ程度の中国語スピーチ原稿や難易度のあまり高くないエッセイ等を用いて訓練を行っている。最初は教員が起点言語テキストに実際にスラッシュを入れる様子を見せ、続けてサイト・トランスレーションを行って声に出して訳出して聞かせる実演を行う。次に学生自身に行わせて不適切な箇所があればコメントを加える方法で指導を行っている。

4.2 デジタルデータと検索置き換え機能

第6学期に卒業制作の翻訳を開始してからワードやエクセルの検索置き換え機能を利用することを教えている。検索置き換え機能を使用するため

にはまず、原文テキストをデジタルデータにする必要がある。ドラマの字幕翻訳であればセリフを全てエクセルに打ち込み、エッセイや小説であればインターネットで原文が掲載されているサイトからダウンロードする（中国語の随筆や小説はネット上で公開されているものが非常に多い）。

チームで翻訳をする場合には特に、何度も繰り返し出てくる人名や地名などの固有名詞を事前に一括置きかえることで表記を統一することができる。主にローカライズなど産業翻訳で専門翻訳者が使用することの多い本格的な翻訳メモリの使い方を学生に教えるのは現実的ではないが、一義的に訳語が決まる固有名詞をワードやエクセルの検索置き換え機能で一度に変換することで作業効率は大幅にアップする。但し、「的」を全て「の」に置きかえるような検索置き換え機能の乱用には注意しなければならない。

4.3 翻訳のためのインターネット検索

「辞書だけでは翻訳はできない」、これは翻訳者には優れた母語の能力と幅広い知識・教養が必要なことを指している言葉だが、学生にとっては辞書に載っていない語をインターネットで検索することを意味しているかもしれない。実際に翻訳を行う過程で、もちろん辞書は頻繁に使用するものの、インターネット検索の果たす役割も非常に大きい。このとき、効果的かつ効率的な検索方法を知っているかどうかは翻訳の速度や質に大きく影響する。グーグルの検索式の書き方、画像検索から対応する訳語を探す方法、日本語版ウィキペディアから中国語のサイトに移動してある事項に関して二カ国語の記述を比較する、中国語ポータルサイトや辞書サイトなどの活用方法を教えることも翻訳実務指導の一環として重要である。

4.4 翻訳論

理論と実践はよく車の両輪にたとえられるが、実際には翻訳理論を学べば即座に翻訳が上手くなるわけではない。翻訳はあくまでも翻訳者個人の才能にたよる仕事であるし、何よりも翻訳理論に触れたことがなくても翻訳者になることができ、翻訳理論の研究者から優秀な翻訳家が出た例もない。学生も理論にはさほど興味を示さず、翻訳論の授業はゼミで受講を義務として課しているから履修しているにすぎない。しかし最終的に提出された翻訳作品の「訳者あとがき」（学生は翻訳を通じて得た所感を「訳者あとがき」の形で述べている）を見ると、翻訳理論で学んだテクニカルタームを用いてはいないものの、「意識・直訳」といった単純で曖昧な概念だけでなく、翻訳における「信・達・雅」、「翻訳におけるイデオロギーの問題、

domestication (受容化) と foreignization (異質化)」、 「言い換えと翻訳行為の違い、翻訳者の取りうる手段」 など、講義で取り上げたいかなる態度で翻訳に臨むかという根本的な問題が意識されていることが読み取れる。

4.5 既存の翻訳作品に学ぶ

実際の文学作品とその翻訳書を対照しながら読むことも翻訳に対する理解を深める手段である。授業では、魯迅の短編小説については異なる時代と異なる訳者による三種類の和訳を、村上春樹の長編小説については同時代の異なる訳者二人による二種類の中国語訳を取り上げ、起点言語テキストの解釈や文体の違いに注目させた。このことから翻訳はただ単に語から語へ置き換え文の構造に沿って並べ替えるだけの作業ではなく、翻訳者の原作に対するとらえ方によって変わってくることを、翻訳者の個性や文体のクセが反映されることがあることを理解させる。同時に、原作を起点言語テキストで読むことのできない読者が作品に対していかなる印象を抱くかも翻訳の仕方によって左右されることに気付かせる。

4.6 翻訳者の思考回路

翻訳で実際に観察できるのは起点言語テキストと目標言語テキストで、翻訳者がどのような思考回路で翻訳を行っているのかはブラックボックスである。翻訳者の著した翻訳技法などの参考書には翻訳の方法が紹介されているが、目の前にあって今まさに翻訳を求められている具体的なテキストがどのような考えを経て最終的な訳文に辿り着くのかはわからない。そこで翻訳研究では翻訳者が翻訳しながら頭で考えたことをその場で口に出す思考発話法 (Think-aloud protocols) という手法を用いて翻訳のプロセスを研究することがある。筆者の担当する卒業研究のクラスでは学生が事前に翻訳し、授業では原文を見ながら読み上げる形式をとっている。修正すべき箇所があると教員 (筆者) が思考発話法を用いた説明を行う。一例を挙げれば以下のような方式である。

学生が訳文を読み上げる。「正午の陽光は灼熱の暑さというわけではなく銅貨を落とすような感じで静かに草を食んでいる馬の群れの上に降り注いでいる」。

教員はここで学生にストップをかけ、次のように述べる。「『銅貨を落とす』っていうのはどんな感じでしょうか、馬たちは林の中に立っていますよね、そこに日の光が差している、日差しは木の葉の隙間を通して馬の背に当たっている、明るい部分が丸い銅貨のような形に見える、これをど

う表現すれば読者にこの光景がイメージできるでしょうか、『暖かな木漏れ日が馬の背中にコインのような丸い形の光の輪になって見える』、これだと少し冗長すぎるか、コインはやはり銅貨としたほうがスタイルにふさわしい、『木漏れ日』を使うとなんだか初夏の並木道を散歩しているような印象だし、それにちょっと陳腐かもしれない、では『木の葉を通した日の光が銅貨のような影を落として、静かに草を食んでいる馬の背に暖かく降り注いでいる』と訳してみたら……」、と独り言のように自分の頭の中に浮かんだ考えを音声言語化して学生に聞かせる。毎週のクラスで思考発話法による説明を聞くうちに、学生は徐々に翻訳者の思考回路と翻訳者がどのように訳文を決定していくのかを理解し身につけていくことができるのではないだろうか。

4.7 背景知識

翻訳を行う上で、背景知識の有無は起点言語テキスト理解のカギを握っている。起点言語の持つ文化的背景についてある程度は知っていなければ何が書いてあるかも分からず、調査をすることもできない。たとえば、学生が「心の中で賀知章の言葉が浮かんできた。子供が客はどこから来たのかと笑いながら聞いた」と訳した部分では、「少小離家老大回 郷音無改鬢毛衰 兒童相見不相識 笑問客從何處來」の全文を知らなくても「賀知章」が中国の詩人であることさえ知っていれば容易にこれが「回郷偶書」という詩の一句であることを調べられる。中国文学を翻訳するためには唐詩・四書五経・四大小説などのごく基本的な知識は不可欠である。これも講義科目として開設しているが、残念ながら実際に翻訳に取り組むまでその必要性はあまり認識されていないようである。

また、いわゆる世界知識、常識の有無も翻訳を効率的に行うための重要な要素である。翻訳者が原作者と同じだけの知識を有していれば最も理想的だが、学生にとっては難しい。たとえば、ナスカの地上絵について『丹尼肯』の著書では宇宙から来た人々が描いたとされている」と述べている箇所がある。これは『神々の帰還』や『未来の記憶』を著したエーリッヒ・フォン・デニケンの名を知っていれば漢字表記の西洋人の氏名に惑わされることなく「デニケン」と訳すことができたはずだ。

5 翻訳チェック・校正

ここでは、学生の翻訳を添削した結果にもとづき、問題点を指摘する。実

際の添削は図2のように手書きで赤を入れた。ゼミの卒業制作では、以上のようかなり細かい添削をほぼ全員に対して行った。

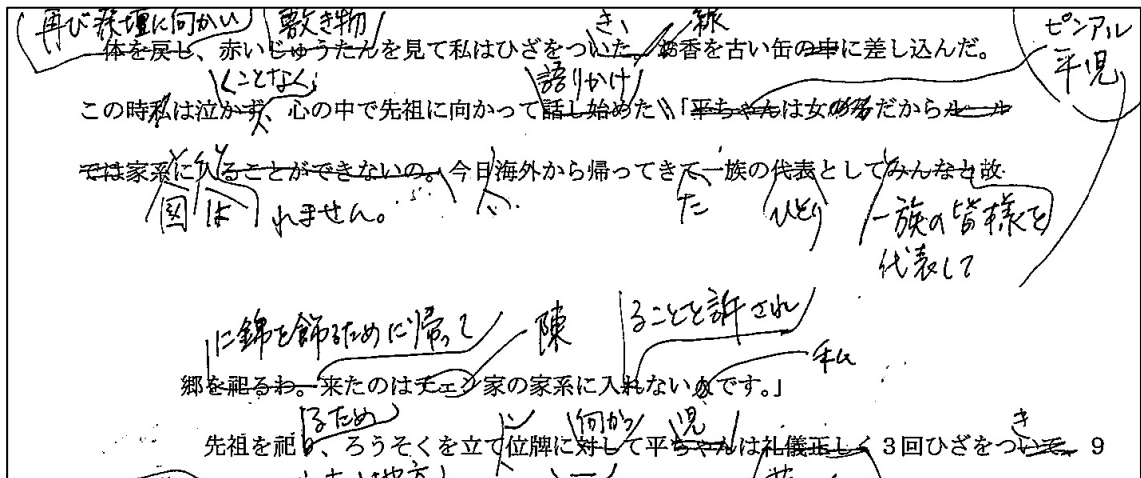


図2 実際の添削例

以下、問題点を項目別に指摘していくが、本論では見やすいように再入力して示す。イタリックは筆者が付け加えた部分、取消線は削除を指示した部分になる。本論第3項で「翻訳には、最初に翻訳者が原文を読み、次に翻訳者が自分の訳文を読み、最後に読者が訳文を読むというステップがある」と述べたが、ゼミでの指導においては、翻訳者が自分の訳文を読んだあとに「指導者が原文と見比べながら訳文を読む」段階がひとつ加わった形になる。市場に出回っている「監訳」に近いと考えてよいだろう（実際には監訳者が原文と対照して細かい添削を行うことはほばない）。

5.1 原語の持ち込み

例1 韓~~韓~~延監督の『第一次メモリー』は内陸の中国で制作されたラブストーリーの良い作品に入る**佳作と言えよう**。先日、~~映画は各地で順に上映のプレミア上映ではされ、これまでの全て新しい「韓粉」まで引きつけた新たな「韓（延監督）ファン」が生まれた。~~

「第一次」は字幕翻訳を行った映画の原題、「内陸」は中国大陸のことを指す。また添削前は「韓」のように中国語簡体字が日本語訳文の中に混在していた。自分が分かることと、読者に理解できることは別であるという認識のない訳出になっている。

5.2 表記法

国語表記に関しては、改行後の行頭一字下げができていない等の基本的な問題も一部にあったが、文章記号が中国語の影響を受けて一般的なルールを逸脱している例が多く見られた（下線と囲み数字は筆者による）。

例 2 ① 15分後私は目覚め、言った②：「よし②；先祖を祀ろう③。」すでに閉じてから① 40年経つ先祖を祀る場所に向かい、

①二桁以上の算用数字を全角で表記している。

②コロン（:）、セミコロン（;）を用いている。

③カギ括弧内に句点（。）が置かれている。

「JTF（日本翻訳連盟）日本語標準スタイルガイド（翻訳用）」には、コロンとセミコロンについては「日本語の文章では用いない」、句点については「閉じかっこの前に句点を打たない」と記載されている。

例 3 隣の人が聞いた：「写真と何が違うの？」言い返した：「足りなかったは風よ！」

中国語文で多用する感嘆符や疑問符をそのまま日本語訳文でも用いているため多少の違和感はあるが、日本語の文章で感嘆符や疑問符を使うかどうかは読み手によって意見が分かれるところであろう。

5.3 虚詞の見落としによる誤訳

例 4 血圧を測るとってみたが薬のせいではないがを飲んだのに数値が上がるっていたは上がっていなかった（低いままだった）。

原文は「量了两次血压也没因服药而升高」、ここで問題になるのは学生の誤訳の多くが虚詞（機能語）の見落としによるものであることだ。例 3）では「也・没・而」の 3 文字が見事に抜け落ちている。

5.4 翻訳者自身にも意味の分からない文章

以下は不適切な逐語訳のために意味が通じにくくなっている例である。こうした訳文については、翻訳した本人に「これを読んで何が言いたいのか分かりますか」と聞くと、翻訳者自身も自分の訳文を理解することができないと答える。不適切な翻訳の二つの極端な例として「原文を変えてはいけないと思うあまり逐語訳にしすぎて意味が通じない」と「自由に想像を巡らして勝手に読みやすく作文したため一見すると流暢だが実際には原文とは全く内容が違う」とものがあるが、例 5 は前者の典型である。

例 5 **若手監督の韓延新監督は各種の対面会で様々なプロモーション活動でファンの目標へと変わっただけでなく追っかけの対象となり、インターネット上での友達の正面を評価するのにインターネットにも出演し始めたもネットユーザーの好意的な書き込みが見られるようになった。—中略—マーク・チャオとアンジェラ・ベイビーはデビュー以来最も熟練した演技で変化に富んだシーンを仕上げた。このスター二方二人の熱狂的な**

ファンたちは今回の映画で間違いなく痛みつきになったにすっかり満足したに違いない。

5.5 結束性 (cohesion)

例 6 あんなにクスコにヒッピーが あんなに湧いて出るのは、マチュピチュのせいでしょう？

例 7 緑色の山谷山々と、田畑にいる民族衣装を纏ったインディアンの が田畑にいる様子は綺麗で平穩だ目を楽しませる平和な光景である。

例 8 曾さんと車の中で、どのように台湾を宣伝していくかを一生懸命に考えた 曾さんと熱心に話し合った。

例 6 は「あんなに」が「クスコ」を修飾するように読める弊があるため関連性の強い箇所へ移動し、例 7 は「緑の」が「山と田畑」にかかっている文になっているため原文の記述通りに「緑の山」と「田畑」を切り離れた。「緑の山々と、」と読点で区切ることもできたが、「インディアンが田畑にいる」と動詞中心の文にすることでより明確に理解できるよう書き換えている。例 8 は意味的な関連性が高い「曾さんと」「話し合った」を近くに置くことで読者の読みの負担を軽くすることが可能であると考えて添削を行った。結束性の弱さは必ずしも誤訳にはならないが、後述する可読性 (readability) を損なう原因の一つともなる。

5.6 可読性 (readability)

読者にとっての可読性 (readability) は翻訳を評価する際の最も重要な指標だが、語彙力・表現力の面で学生の翻訳は readability を備えたものとは言い難い訳文が多い。

例 9 馬を無理に速く走らせる ニようとは強い セず、私は背筋をまっすぐ 伸ばして座り、草原のそよ風に吹かれた。が 伸びやかに吹き抜け、私の心は、空へと ここから舞い上がっていったる。

一文を二分割し、主語の「私」を一貫して維持するように書き換えている。元の訳文では「私は座り」「そよ風が吹き抜け」「私の心は舞い上がる」という三要素からなる構造だが、添削後は「私は（風に）吹かれた」、「心は舞い上がっていった」というそれぞれ一要素のみ記述する二文に分かれたため、読者の読みの負担は軽減され、情景がよりイメージしやすくなった。

漢字で書かれた西洋人の氏名や欧米の地名など固有名詞は中日翻訳においては非常にやっかいな問題となる。メールで以下のような質問を受けた。

例 11 【質問】「“希哇洛斯·布拉浮” と呼ばれる原住民が今もなお吹き矢を吹いて狩りをしているという噂があり、彼らは姿を現すことはない」の部分の原住民の名前がわかりません。似たような読み方で criollos は出てきたのですが、日本語が出てこなくそのままカタカナ読みで「クリオロウス・ブラフ」にしようかと考えています。

Criollos までは調べたが訳語に確信が持てる前に諦めてしまっている。「似たような読み方」とあるが原文の“希哇洛斯·布拉浮”の発音は「Xiwāluòs ī·bùlāfú」（あえてカタカナ表記するとすれば「シワルオス・ブラフ」）であり、「los」に僅かに共通点があるが、全体的に似ているとは言えない。さらに学生が提案した訳語「クリオロウス・ブラフ」をグーグルで検索しても一件もヒットしない。裏をとっていない非常に杜撰な調査である。

中国語では外来語音の「ヒ」を「Xi（シ）」、「ヴァ行音（V）」を「ワ行音（W）」で置きかえる習慣がある。語音から見て Criollos である可能性は非常に低い。原文から読み取れるヒントは、アンデスの先住民、吹き矢を使う、呼称に「シ、w 音」または「ヒ・v 音」および r または l 音を含む、ということになる。質問に対しては以下のように返信した。

【回答】 クリオーリョ (Criollo) は中南米など、ヨーロッパ以外で生まれたヨーロッパ系人種で先住民ではないようです。“希哇洛斯”は「ヒバロ族」(jivaro)という種族、“布拉浮”(ブラフ)は吹き矢「ブローガン blowgun」のことでしょう。以下のサイトを参照してください。

<http://endic.naver.jp/eee/ae121c4e7d5941588f21647261deb39a>。

<http://baike.baidu.com/view/977809.htm>,

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%92%E3%83%90%E3%83%AD%E6%97%8F>

<http://silentreed.hubpages.com/hub/blow-gun>

【回答以上】

例 12 【質問】この湖は“哈娃哥恰”と呼ばれ心の湖という意味だ、の“哈娃哥恰”ですが同ページで下から 5 行目にも哈娃が出てきており、哈娃はアダムとイヴのことだと前回お聞きしたのでハヴァと訳しました。「ハヴァグチア」ではないかと思っているのですが検索しても出てきませんでした。

【回答】 「药师的孙女」の章、65 ページに原先被称为银湖的那片美丽之水，从此改了名字，我们叫它“哈娃哥恰”，就是心湖的意思。（もとは銀湖と呼ばれていた美しい湖は、その時から名を変え、私たちは「哈娃哥恰」、つまり「心

湖」と呼ぶことにした)とあります。エクアドルの湖を調べると「～コチャ」という名がついているものが多く見られます。コチャ (qocha) とは、南米大陸アンデス高地部 (山間盆地やアルティプレーノ含む) で見られる、自然のため池のことだそうです。ペルーに Lake Jahuacocha (ハワコチャ湖) があることが分かりました。したがって、ここはひとまず音の近接している「ハワコチャ」でいこうかと思えます。参照サイトは以下です。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B3%E3%83%81%E3%83%A3>,

<http://bunanokai.chu.jp/news+article.storyid+27+page+2.htm>

<http://www.salongo.jp/ecuador/lakeinfo.htm> 【回答以上】

以上からわかるように、学生は調査が不徹底ために固有名詞を適切に翻訳できない例が少なくない。インターネット検索には多少のコツがあるとはいえ、根本的な問題は確実な結果を得られるまで諦めずに様々なキーワードを試しながら調べる根気がないことにある。上記のような質問が授業中で提起されれば、実際にインターネット検索のデモンストレーションをしながら訳語を突き止めていく作業を見せ、翻訳実務において重要な役割を果たすネット検索の方法を学ばせることができる。時間はかかるが、翻訳者には探求心と根気が必要なことが理解できるはずだ。

6.1 典拠

中国古典文学などに典拠のある文が出てくると翻訳がかなり怪しくなる。

例 13 雨のように涙を流した時、7、8歳の朱色の服を着た子どもたちが野次馬のまわりで、大笑いしていた。心の中で賀知章の言葉が浮かんできた。子供が客はどこから来たのかと笑いながら聞いた。

→私が滂沱の涙を流していたとき、周囲の人々の中に赤い服を着た七、八歳の子どもがいて大声で笑っていた。思わず賀知章の「兒童あい見えてあい知らず、笑いて問う客はいずこより来たと」(子どもが「旅のお方はどこから来たのですか」と笑いながら尋ねた) という詩の一節が脳裏に浮かんだ。[訳注：出典は賀知章の詩「回郷偶書」。原詩は「少小離家老大回 郷音無改鬢毛衰 兒童相見不相識 笑問客從何処来」。]

例 14 紅樓夢の中には「ため息出るほど嘆(なげ)かわしいものであった」のは姉妹であり——春だった。

→それは紅樓夢の四姉妹「元春、迎春、探春、惜春」に新たに加わった妹、「在春」であった。

原文には「是《红楼梦》里，“元迎探惜”之外多了的一个姊妹——在春。」

とある。文の構造自体は単純で、“元迎探惜”が紅樓夢に登場する四姉妹「元春、迎春、探春、惜春」であることがわかれば、「在春」が新しく加わった娘の名であると理解することは難しくないのだが、不適切なインターネット検索のために誤訳となった。訳文で「ため息出るほど嘆（なげ）かわしいものであった」としてしまったのは、四人の娘の名に用いられる「元迎探惜」は「原応嘆息」（もともと嘆息すべきである）と字音を同じくし、娘達の悲劇的な結末を暗示している。インターネットで「元迎探惜」を検索すると「原応嘆息」についての解説が多くヒットするため、原文の構造をなおざりにして深く考えずにコピー&ペーストして何とか辻褄を合わせた訳文にしたのであろう。

7 外国語学習者から翻訳者へ

以下に、卒業制作の訳者あとがきを引用し、翻訳を通じてどのような学びや気づきがあったのかを紹介したい。

7.1 翻訳に対する所感

- ・他の学生から翻訳はただ訳すだけだから難しくないだろうと言われることもあった。当たり前のことかもしれないが、それは大きな間違いだと驚く程思い知らされた。ただ意味を取る作業をすることと、その意味を相手に伝える作業をすることは大きな差があった。

- ・文化がもたらす言葉の意味を理解することは重要なことであり、訳者には中国語の翻訳を行う際に語彙力や言語力に加え中国文化に対する理解力も必要とされていると感じた。文化的・民族的差異が言葉の理解に与える影響はとても大きい。言葉の背景にある文化を理解することは、同時に言葉の理解を深めることにもつながるのだ。

- ・翻訳者がどこに重点を置くかで訳文は大いに変わってくるのだ。意識の場合、まとまりのある文章で、意味はとりやすく、内容が理解しやすいものになるが、原文のもつ味わい深さやリズム、作者の主張を失う可能性がある。

- ・字幕翻訳制作を通じて私が導いた訳者とは橋を造る建築家のような存在である。この橋とは両岸にある、異なる文化を繋ぐ役割である。仮に間違った場所に橋をかけたら、進む方向が異なり目的地へとは辿りつかない。

7.2 母語の能力について

- ・翻訳する上で最も重要なことは、ターゲットとなる言語（本作において

は中国語)をいくら知っているかではなく、日本語をいかに知っているかであると思う。外国語を理解するためには、まずは母語がしっかり確立していなくてはならず、本作においては、自分自身の日本語力の低さを実感させられることとなった。

・日本語の表現についてだが、これについてはひたすら自らの日本語能力の至らなさを悔やむ他ない。ただ日本語にするのではなく、読める日本語にするということがどんなに難しいことかまざまざと思い知らされた。一中略一副詞の位置や助詞の使い方に至っては、普段何かを書くときや話すときにどれだけ無頓着であったかということにも気付いた。今日に至るまで日本語を日常的に使っているにも関わらずここまで苦戦したことに驚きを隠せない。

・字幕翻訳の作業を通じて、母語である日本語の表現力の難しさを改めて実感した。訳者自身の日本語のことわざや慣用句などの未熟さに気がつくこともできた。

・自身の弱みを強く感じたのは日本語能力の低さだったと思う。つまり日本語の語彙力のなさだった。日本人だから日本語ができると簡単に考えられているのは間違っている。普段話している言葉だけでは翻訳作業では語彙が足りないからだ。この翻訳作業を通して日本語の語彙を増やす努力をする大切さを感じた。

・この卒業制作を通して学んだことは、訳者は原文の語学力だけでなく、母語である日本語力や幅広い知識、教養、豊かな表現力を兼ね備えていなければならないということ、また訳者はこれらを備えてこそ初めて原作者にも読者にも責任を負える訳文が完成するということだ。

・この翻訳を通じて改めて日本語の難しさを実感した。中国語ネイティブの学生と訳を考えるにあたり、この日本語はどういう意味なのか、どうしてこの日本語を使うのかという話が何度も上がり、その度に自分自身の母語について考えさせられた。また中国語から日本語に訳す際に、適当な言葉が見つからない度に自身の日本語力の未熟さを痛感した。

・卒業制作を通して自分の中国語力の未熟さを痛感したと同時に、母語の語彙力の少なさや間違った使い方など、日本語力の未熟さも感じた。

・翻訳をする上で忘れてならないのは、自国語の感覚を大切にすることだと思います。これから翻訳をする機会があったら日本語と日本語的な感覚を大切にしていきたい。

7.3 翻訳の難しさと課題

- ・(中国語の読解力の未熟さから)感情移入することはとても難しかったので、翻訳する際には作者の心理状況に寄り添って文字にするというよりも、彼女が何を考えているのかをできる限り想像し、シーンを分かりやすく表現することを意識し翻訳しようとした。

- ・作者が引用している小説のフレーズにおいても、中国の文化に精通している人であればともかく、そうでない人がいきなり読んだ場合であってもすぐに理解してもらえるような訳文を目指す、やや説明口調になってしまい、原文と内容が離れていってしまう恐れがあった。

- ・この翻訳作業を通しての自身の課題は、1、日本語の語彙力を増やすこと。2、パソコンをもっと使えるようにすること。卒業も控え社会人になるので日本語を知ることや必要最低限の初歩的なワードやエクセルを使えるようになることは大事なことだと思ったからである。3、中国の文化や歴史・古典の基礎知識をもっと増やす努力をすることだ。

- ・最も訳者を悩ませたことを挙げるとすれば、まず1点目は題材とされている国の歴史や文化、風習をどれだけ理解しそれを読者に分かり易く表現できるか、2点目は中国の成語をどのように表現するか、3点目はどこまでを意識とするのかという難しさ、4点目は母語である日本語能力の乏しさである。

- ・翻訳者には語学力や読解力だけでなく、表現力や幅広い知識も必要である。日本人の第三者の誰が見ても分かるように訳すためには、中国の文化や習慣を学ぶだけでなく、日本についての知識も熟知していなければならない。

7.4 翻訳の工夫と面白さ

- ・翻訳の醍醐味のひとつは、翻訳を進めていく過程でそれぞれの文化の違いを発見し、見直すことができるということだと思った。

- ・翻訳をする際に、登場人物と自分自身を重ね合わせて、自分の気持ちを相手に伝えやすく表現するにはどうしたらいいのかを考えながらセリフを表現した。

- ・訳者が困ったことの1つに簡単な単語の訳し方である。例えばよくこのドラマで出てきた言葉「打击」「精神」「仗义」である。辞書で引くと簡単に意味は出てくる「打击」なら「攻撃」「打撃」等。しかし、日本語で攻撃と使うと戦争のような過激なことだと想像してしまう。今回は「ショッ

ク」等と訳した。このように日本語と中国語での同音異義語や同じ単語でも使われ方の違いなどを意識しながら訳すように心がけていた。

・中国の漢詩など日本人に伝えるために、「意識にするのか直訳にするのか」という点で悩んだ場面が多々存在した。漢詩は「意味」を訳すのではなく、漢詩を使っているという「雰囲気」を受け手が持つよう、少し硬い言葉で訳文を作成した。

・意識は原文の伝えたいことを伝えることのできる訳文にするためにも、受け手がわかりやすい訳文にするためにも必要なものであるが、原作の意味を超越した意識になると、原作の雰囲気を壊し、訳者オリジナルの文章となってしまう。字幕翻訳者がすべき意識のバランスの難しさを痛感した。翻訳をする際に、登場人物と自分自身を重ね合わせて、自分の気持ちを相手に伝えやすく表現するにはどうしたらいいのかを考えながらセリフを表現した。

・チーム翻訳の過程でいちばん印象に残っていることは、他人の翻訳を見ることが非常に勉強になると思ったことと、自分では見つけられなかった誤訳は他人の目に触れないと発見できないという点でした。

7.5 翻訳を通じて得たもの

・翻訳者というものは様々な知識に精通している必要がある。膨大な知識量を支える原動力はおそらく翻訳者の知識に対する好奇心が貪欲であることなのではないだろうか。今後のためにも、更に勉強を重ねていこうと強く感じた。

・中国語のことわざや熟語の意味を理解し、日本人になじみあるものに変換するという作業を行う過程で、日本語力を磨くことができた。

・訳しているときに戸惑いを覚えたことの多くは中国独自の考え方、日本と違う異国の文化に触れた時だった。(女性が最初のデートに出かけるシーンでわざと遅刻するのを見て)私はどうして女性は男性を待たせないといけないのか全然わからなかった。しかし、中国人留学生に話を聞いてみると初デートでは緊張するので女性は男性を待たせたほうが交際していく中でいいのだと教えてくれた。日本ではそのような習慣はないし、確かに女性は男性を待たせるときは多いがわざと待たせるようなことはしないので日中の習慣の違いに気づいた。

・本作は愛情、友情、憎悪、後悔や感謝など人間の感情が多く詰まっており、登場人物の感情を込めたセリフを翻訳することで中国語の口語表現に

ついでに理解が深まった。また、登場人物の年齢層が幅広いため、多くの考え方や価値観に触れ、自分自身の視野を広げることができた。

- ・ 意識というのは原文をしっかり把握して完全に理解した上でやらないと誤訳になり易い。決して自分勝手なニュアンスで訳してはいけない。

- ・ 翻訳には多くの知識と共に、翻訳する題材の内容と同等に向き合える教養、文化的背景の理解、そして登場人物一人一人への理解があってこそ原文にも読者にも忠実で美しい翻訳が出来るのだと感じた。

- ・ 翻訳者には両言語の語学力だけでなく、両国の文化や歴史的背景、生活習慣など幅広い知識、教養が必要であること、そして翻訳は辞書だけで調べようとするのではなく、インターネットや文献など、あらゆる手段で調べる努力が求められることに気付いた。

- ・ この卒業作品の製作は、これから日本語教育に携わろうとっていて、さらに外国語の勉強も続けていこうとも思っている私自身、日本語と向き合う大切さを学び、異文化理解について再び考える良い機会となりました。

8 まとめ

学生は外国語学習者から翻訳者の卵に脱皮できたのだろうか。筆者が担当するゼミでは第6学期からおよそ一年半をかけて大部の作品をチームで翻訳する作業を行う。翻訳が無事に完成したときは、学生だけでなく教員も大きな達成感と解放感に満たされる。自分自身のテーマで執筆する論文に比べると軽く見られがちな翻訳ではあるが、一冊の書籍、二十話以上ある連続ドラマなど、まとまった作品を最初から最後まで訳し通すことは決して容易なことではない。この大変な仕事を成し遂げた後に書かれた「訳者あとがき」を読むと、翻訳に対して最初に抱いていた漠然としたイメージが、翻訳の実践を通してより具体化し、母語と第二言語に対する敏感さ、自国と相手国の文化に対する理解が確実に深化しているように思われる。

翻訳の効果的な指導法はまだまだ研究途上にあり、国語表記・各種のスキル・翻訳の原理は教えられても、肝心の母語の運用能力は「素質」として片付けられることも少なくない。ゼミと卒業研究にその他の演習及び講義科目をいかに有機的に結びつけ、言語の四技能「読む・書く・聞く・話す」に加えて第五の技能である「訳す」力を伸ばすかが今後の課題である。本論ではまだまだ書き足りない内容もある。今後も翻訳教育について考えていきたい。

参考文献

浅羽亮一 (2003) 「文法訳読法 (Grammar-Translation Method)」小池生夫 (編集主幹) 『応用言語学辞典』 研究社

石原知英 (2008/10) 翻訳タスクにおける思考発話法の反作用 広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 第 57 号

http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/metadb/up/kiyo/AA11618725/BullGradSchEducHiroshimaUniv-Part2-ArtsSciEduc_57_183.pdf

加藤重広、町田健 (2004/07) 『日本語語用論のしくみ』 研究社

篠塚勝正 (2010/02) 「文法訳読法と通訳訓練法における、TOEIC®スコアの伸び率およびその脳言語科学的考察」 成城イングリッシュモノグラフ 第 42 号(特集号) 成城大学大学院文学研究科

<http://www.seijo.ac.jp/graduate/gslit/orig/journal/english/pdf/seng-42-08.pdf>

JTF (日本翻訳連盟) 日本語標準スタイルガイド (翻訳用)

http://www.jtf.jp/jp/style_guide/pdf/jtf_style_guide.pdf

Maria Gonzalez Davies “*Multiple Voices in the Translation Classroom*” 2004 Benjamins Translation Library

Silvia Bernardini “*Think-aloud protocols Achievements, limits, future prospects*” Target 13:2 (2001), 241-263. Scuola Superiore di Lingue Moderne per Interpreti e Traduttori, University of Bologna

<http://www3.uji.es/~aferna/EA0921/3c-TAPs.pdf>